

物語の作品性について

浜田 秀（天理大学文学部）

Shu.Hamada@ma4.seikyoku.ne.jp

・「物語」に関しては、さまざまな文脈で語られてきている。小方孝（1999）は「物語現象」という用語で、人間のコミュニケーションの全領域にわたって物語的存在を認めている。「物語」は、人間に関するかなり広い領域を有効に指すことのできるメタファーとしても流布している（「近代という物語」「マルクス主義という物語」等々）

・ここでは、話を微視的に考えたい。つまり、発話の現場に立ち戻って、最狭義の単純「物語」を考え、そこからの展開という形で分析を行う。

・最狭義の「物語」を考えるに当たって、本発表で注目したいのは、鈴木重幸（1972）・工藤真由美（1995）等、言語学研究会の人々によって使用されている「アクチュアルーポテンシャル」という対立概念である。アクチュアルとは、動作や状態が、現実の特定の時間に現れることを意味する。一方、ポテンシャルとは、時間の特定性が捨象され、その主体が潜在的にその動作・状態を持っているということの意味する。最狭義物語とは、ある種のアクチュアル性をその本質としてもつテキストの事である。一方、ポテンシャルは、「説明」として機能する。

アクチュアル ： 物語
ポテンシャル ： 説明

・ある発話がアクチュアリティを持つということは、とりもなおさず、その発話が「ひとまとまり」を志向することである。この「ひとまとまり」への志向が、作品への端緒となる。「作品性」とは聞き慣れない言葉であるが、「ひとまとまりのものとして存在すること」程度の意味で使いたい。（もちろん、「作品」であることと、文学であることとは、かなりの距離がある。）

・発話がひとまとまりのものとして存在するためには、輪郭 内部結合 同質性 複雑性（固有性）といった戦略が使用できる。アクチュアルな時間性をもった発話（物語）は、これらの戦略を使用しやすい、といった性質を持つ。

・以上のような物語の諸相、又、物語と説明の相互作用について、話芸や子供の発話などを中心に考察を行う。

<参考文献>

小方孝（1999）「物語現象の諸側面に関するノート ―計算構造物語のための基礎的考察―」『文学と認知・コンピュータ1 ―認知文学論と文学計算論―』日本認知科学会テクニカルレポート No. 29
工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト ―現代日本語の時間の表現―』ひつじ書房
鈴木重幸（1972）『文法と文法指導』むぎ書房
浜田秀（1995）「ストーリーラインと感覚的リアリティーの構造について」『人文学報』第75号